

【代表研究者】

桑原 知子

九州大学大学院 人間環境学研究所 博士課程

【研究題目】

「われわれの文化」の力はいかに再生産されるか

南インドにおける「映画を観る」という社会的行為と映画制作の文化人類学的研究

【研究の目的】

本研究の目的は、世界の映像生産の一中心である南インド・タミル映画界において、地域政治との関係をとおして培われた映画の独特のスタイルが、「われわれの文化」として人々に作用する力をどのように再生産し続けているのかを明らかにすることである。

この目的のために、本研究は、多様な実践をともなう「映画館で映画を観る」という社会的・集合的行為そのものに注目し、人々がこのさまざまな身体的・情緒的経験をともなう行為をとおして実現してきたものはなにか、また映画がそのような経験を喚起することをとおして獲得してきたものはなにかを考察する。さらに、作り手たちが、エリートの映画言説や世界の映画界の動向への接近可能性をもちつつ、映画をとおして人々がつくりだす時空間をどのように可能にしているのかにも注目する。

本研究は、人々の身体・感性をとおして「われわれ」たるアイデンティティを不断に創造しつづける技術というもう一つの道から、映画という近代の制度を再考するものである。

【研究の内容・方法】

2003年1月からの約6ヶ月間、インド・タミルナードゥ州チェンナイにおいて、以下の内容・方法で現地調査を行った。

・チェンナイ市内の映画館で、どのような（年齢、性、階層等）人々がどのような映画を観ているのか、かれらが映画のなにに対しどのように反応するのか、それによりなにを実現しているのかについて参与観察を行なうとともに、観衆が映画に望んでいるものはなにかについてインタビュー・アンケート調査を行なった。また、映画館の外での日常的実践の参与観察をとおして、それらが「映画館で映画を観る」という行為とどのようなつながりをもっているのかを考察した。

・映画監督およびその予備軍（Television and Film Institute of Tamil Naduの学生、助監督など）を対象に、タミル映画の歴史・現状および観衆に対する態度、他のインド映画および外国映画に対する態度、政治的・宗教的立場、どのような映画をつくりたいと望んでいるか等についてインタビュー・アンケート調査を行なった。

・新聞・雑誌・TV等のメディアが、タミル映画の歴史についての知識を観衆に与えるもの

として、また新しい作品についての判断材料・判断基準を観衆に与えるものとして、どのような役割を果たしているか（果たしてきたか）またそれら他メディアにおいて映画（および映画人）がどのように語られているかについて、文献・TV映像資料の収集を行なった。
・タミル映画の形式・内容がどのように歴史的に変遷してきたか、現状はどのようなものであるかを、特に身体的・感性的な実践・経験を喚起する技術という視点から注目し、タミル映画の映像資料収集を行なった。

現地調査以外の期間には、新旧タミル映画の作品の構造、典型的な場面で用いられるイメージ（映像、音）人物の描き方などの映像分析を進め、なにが映画を「われわれ」たるアイデンティティの感性的拠り所として可能にしているのかを探究する手がかりとした。

【結論・考察】

タミルの人々にとって映画館とは共に映画を観る人々の間で多様な経験が共有される場であり、それら経験は映画館の外の様々な場面でもカセット・TV等の装置によって擬似的に再生・反復され人々の間で共有される。この映画館内外の「映画的经验」の時空間では、年齢・性などにより強調点に濃淡をもちながら、英雄崇拜、擬似的政治集会、祝祭的興奮などが映像・音声を喚起力として実現され、それを共有する（できる）人々の間の関係性が再創造されている。さらに、「映画的经验」はアイデンティティの語りの領域にも拡大され、しばしばその経験の共有能力が「『われわれ』とはなにか」の試金石として語られる。

多くの作り手にとっても自らの「映画的经验」を出発点にそれを再生・強化することが目標である。そうした作り手たちが内外からの諸要素をタミル的「映画的经验」を喚起する技術に変換し取り込むことにより、身体的・共同的経験によってアイデンティティを創造する「われわれの文化」としてのタミル映画の力は再生産され、また、タミル映画は不断に再定義され続けているといえる。